

平成29年度善誘館小学校外部評価書

平成30年3月 6日作成

学校関係者評価委員会

実施日：平成30年2月26日（月）午後4時10分から5時

会場：善誘館小学校校長室

参加者：学校関係者評価委員 小倉正夫（学校評議員）・志村雄二（学校評議員）
林 昌明（学校評議員）
高原幹夫（琢美地区自治会連合会会長）
内藤久芳（富士川地区自治会連合会会長）
小山田美喜子（PTA会長）・芦澤美鈴（PTA副会長）
学校側 川口ますみ（学校長）・望月正紀（教頭）・坂本 暢（教務主任）

1 学校側からの説明

(1) 自己評価結果についての説明（教頭）

「善誘館小学校自己評価書」及び「善誘館小学校自己評価・児童用アンケート・保護者用アンケート分析結果」に基づく説明

(2) 事前に寄せていただいた意見についての回答・説明

- ・「アンケート調査内容について」、「保護者用，児童用，教師用」と3種類に分かれているが設問項目が異なっていて、相互比較ができないのではないかと指摘に対し、できるだけ、比較対照が可能で分かり易くなるよう、設問項目順番の入れ替えや、内容等の検討を行っていくと回答。
- ・「授業はわかるようにされているか」という質問が教師用にないという指摘に対し、校内研究の中で、授業内容や方法等の振り返りアンケートがあり、その結果も活用している旨回答。
- ・「質問に対する回答文の種類について」、表現を質問に合った形になるよう変えていく方向で検討。
- ・児童のマイナス評価面での回答について、学級担任は把握しているが、さらに細かく状況を分析し、回答した児童に対し、必要な対応を続けると説明。
- ・「設問によっては（7月と12月を比較し）数値が低下しているがその理由は」という質問に対しては、「1学期より2学期の方が、学習内容等が増え、活動内容もより進展したため」「5・6年生では、自分に対して、より厳しい見方をする傾向が出てきた。3・4年生では次第に自分の実情理解が進んだことも一因ではないか」と回答。
- ・「教師，児童，保護者の回答傾向に大きな違いがある。教師はほとんどの設問に positive に評価しているが、児童・保護者の回答にはかなり negative な評価がある。この違いが生じた原因と回答者の状況把握が必要では」という指摘に対し、「確かにその通りである。さらに詳しく学年ごとの回答分析を行うと、学年による差も認められた。今後、状況把握と継続対応に努めたい。」と回答。
- ・「学校評価委員会・学校評価会議」の機会をさらに活用し、いろいろな立場、多面的な見方で結果分析を行い、考察を加える中で、よりよい改善策を探っていきたいとまとめ。

2 協議（議長：小山田 PTA会長）

自己評価書から受ける善誘館小学校の実態（本年度の重点目標への取組についての特徴、要望等）

(1) 平成29年度善誘館小学校の教育活動・学校運営について

・(アンケート結果について) 教師の回答によっては、不安を感じるものもある。また、保護者の回答結果への不安も感じる。自分たちの行動を振り返ることなく、「学校任せ」の傾向があるのではないか。子供のためにも地域の中での人間関係作りを考えるべきだ。学校からも啓発してもらい、全体でのバランスを取りながら躰をするのが望ましい。

(2) 平成29年度学校評価重点目標への取組について

①「よりよい人間関係づくり」②「言語活動の充実」③「たくましい体づくり」

- ・スポーツ少年団のコミュニケーションも体力づくりや人間関係作りには大切な場であると考えられる。
- ・「自立できる人間」が最終的な目標であると思う。学校と保護者との距離感を詰め、相手の目を見てしっかりものが言えるような関係を目指したい。「ここに向けてがんばる」という意味で「重点目標」はすばらしいと思う。
- ・「読み聞かせ活動」「読書活動」が特色であるが、低学年は読み聞かせ中心で、高学年は自分で読書するという活動なのか。
- ・全校で年間を通し、定期的に(火曜・金曜)読み聞かせを行っている。発達段階に応じて活動を行っているため、低学年は読み聞かせ中心ではある。
- ・低学年のうちに、それなりの「読む力」をつける必要がある。学年が上がってきたら、ある程度長い文を読むよう習慣づけたい。数学の計算問題は解けるが、応用問題など、問題文が読めないから解けない実態がある。大学の授業では、90分の忍耐力がない学生もいる。学習に集中できる時間を段階的に設定していく必要がある。
- ・不登校であった子供でも(留年させず)上の学年に上げてしまうのはいかがなものか。例え上の学年に上がっても、学習についていけず困ってしまう事実がある。
- ・夜、塾に通っている子供が学校で勉強しないということがある。学ぶ意識をつけてもらうよう家庭に啓蒙する必要がある。字を見る癖をつける、習慣づけも大切だと思う。
- ・3人の子供がいるが、学年ごとに担任の先生が読書指導を工夫している。中学年では、「絵が少なく文字が多いものを読むように」、低学年では、音読カードを活用しての習慣づけなど。
- ・読んだ本についての読后感想文に取り組みせると、字を書くことへのハードルが低くなる。ぜひ、取り組んでほしい。
- ・「読み聞かせ活動」のおかげで、読書好きの子供たちが増えている。ただ自分の好きな種類の本だけ読む傾向があるため、図書館司書が「いろいろなジャンル(分類)の本を読む」取組など学校体制の中で行い効果を上げている。
- ・「集中し、座って学習する」ことについて、学年ごとの発達段階に応じて時間設定するなど、小中学校の連携の中で取り組んでいる。「新聞を読んだ感想」、「授業についての感想」などにも取り組んでいるが、「文でまとめて書く」ことを習慣づけるため、意図的、計画的に教育活動に仕組んでいく必要がある。
- ・逆上がりの補助具については、効果が薄いのではないか。腕の力を鍛える懸垂がきちんとできるようになって、逆上がりも上手にできるようになる。体力がつくと出来るようになることを生かした教育が大切なのではないか。
- ・長い距離を走る体力づくりには、休み時間、外で走り回る経験も大事だと思う。1年生から6年生まで、子供のうちに歩・走・跳の運動に取り組む機会を増やしたい。

報告書作成責任者 小山田美喜子(P T A会長)